

長崎くんち「小屋入り」奮闘記

長崎史談会 副幹事長 福田哲也

6月1日(晴)。長崎っ子の血を沸かす国指定重要無形民俗文化財、長崎くんち奉納踊りの稽古始めとなる「小屋入り」の朝が来た。初出場の期待と左膝負傷が完治せぬまま出場する不安とが交差する。午前5時過ぎ、今博多町にある宮川ビルに到着、誰も来ていない。それもその筈、集合時間より1時間も早い、己のせっかち性に苦笑。

この宮川ビルに長崎史談会事務所がある。今年の踊り町は、今博多町、魚の町、玉園町、江戸町、籠町の5ヶ町。今博多町にはお世話になっていることから、史談会からも応援出場することになった。同町の宮川名誉会長はじめ原田会長、高木、今道、稲岡、村崎、大塚、山口(料亭「青柳」若主人)、福田の9名の幹事が名乗り出る。宮川先生のお世話で貸衣装屋から借りた紋付・袴を、先生のご令室と松澤幹事の知人(着付け教室の先生)のお二人に着せて戴く。紋付・袴は結婚式以来半世紀ぶりのこと、我ながら凛々しい姿に変身した、かに見える？

7時20分、消防第六分団前集合。艶やかな和服姿の踊り子たちが本踊りのルーツ今博多町を象徴していた。宮川奉賛会長(宮川先生の実弟)、岡部自治会長の挨拶や注意事項の後、町旗を先頭に役員・踊り子・一般町民など約50名が、シャガリの賑やかな音とともに同町を出発する。大井手町坂へ日銀前～踊馬場を経て、左膝の激痛に耐えながら諏訪神社の長坂を登って本殿へ。一番町今博多町の清祓いの時間には少し間がある。同町専属カメラマンに記念写真を撮って貰う。この時、同僚の一人の袴の紐が緩み、それを踊りのお師匠さんが手直りする風景が、絶好の被写体となり、多くのカメラマンのフラッシュを浴びる。緊張の中にも和んだひと時、ホッとさせられる。

8時00分、今博多町関係者全員が本殿で清祓いの儀、厳かに奉納踊りの無事を祈願した。本殿上座には諏訪神社常任総代・西脇氏(当会幹事)の姿もあった。お神酒を戴く、微少なながらも緊張した喉には清々して旨かった。長坂を下り～新大工町本通り～帆士薬局から右折し電車通りを横断して伊勢宮で参拝。中通り～銀屋町～皓台寺前～鍛冶屋町から八坂通りを経て八坂神社本殿へ。この石段でも膝痛に泣く。膝痛にとって、階段は登りも辛い下りはさらに辛いことを味わう。八坂神社でも座椅子を借りて清祓いを受けた。

初夏の日照りが一段と増す中、八坂神社～正覚寺電停～油屋町～浜の町アーケード街～鉄橋を渡り、築町から電車通りを経て、やっとの思いで帰町できたのが、11時30分。疲労困憊の中にもジワジワと達成感が湧く。宮川ビルで昼食兼小休止。汗ばんだ羽織・袴の帯を解き、キンキンに冷えたビールで、まずはカンパニー…、美味しい！。あー、参加してよかったあ…

14時30分、「打ち込み」(年番町などへの挨拶廻り)の時間になる。膝のことを考え、これ以上の参加は無理だと思っていたが、原田会長の「打ち込みこそ、くんちの醍醐味…」、どの言葉に触発されて奮い立つ、渋々ながらも男の意地とばかりに参加。今道、稲岡、村崎、大塚、山口の各幹事の同行が心強い。唐人パッチ姿に町名入りの弓張り提灯を片手に、いざ出発。17ヶ所を廻る強行軍とのことで踊り子たちの姿はない。心細さは増すが、一段と冴え渡るシャガリの笛と太鼓の音が背中を押してくれた。囃子の合間に同行者が発する“トコ・ドッコイ！”(正否は定かではないが、こう聞こえた)を真似、わが膝を励ましながら、歩く・歩く・歩く。

大井手町(花柳流師匠宅)～新大工町～古町～勝山町～玉園町～金屋町～長崎商工会館～櫻町～魚町～新橋町～諏訪町～磨屋町～西古川町～榎津町～籠町～江戸町～賑町を練り歩いた。

“さすが、くんちの町ながさき…”の実感が湧く。どの町でも幔幕を張り、正装した町衆たちから丁寧なご接待(冷たいお絞りにお茶・ビールなど)の施しを受けるからだ。そんな「もてなしの心」に支えられながら18時前、無事帰町。挫折を免れたのは偏に仲間たちの叱咤激励のお蔭である。某幹事の万歩計は、な・なんと、2万1千歩を示していたという、苦行の行程が改めて俚げるとともに、重責を果たせた充実感に浸る。

出場を申し込んだ後に左膝半月板を損傷して入院。一時は断念を考えたが、参加したい気持ちの方が強かった。結果は、膝痛というリスクはあったものの、それに優るとも劣らない貴重な体験をさせて戴いた今博多町と仲間たちの支えに、心から感謝を申し上げたい。そして、頑張ったわが膝にも、ご褒美をあげたい。

長崎に居住して既に半世紀余、“これでやっと真の長崎っ子になれたあ…”の気分。“さあ、本番もがんばらんば！”



平成24年6月1日 於諏訪神社 今博多町小屋入り

左から村崎、福田、高木、宮川、原田、大塚、稲岡、今道、山口の各氏